有事における出征将校・兵士の意識と心理行動
――日独青島戦争を事例に――

林　美和

はじめに

本稿では一九一四（大正三）年の第一次世界大戦で、日本陸軍が参戦した日独青島戦争（以下、青島戦と略記）を事例として取りあげ、有事状態における軍隊の内情、とくに出征将校・兵士の意識変容とそれに基づく心理行動に焦点を当てて考察していく。

当時、陸軍は青島戦を日露戦争と同じく、三国干渉に対する復讐的意味合いを含んだ戦争であることを社会に流布していた。そして、陸軍が意図していたとおり、国民はこの戦争を復讐戦として受けとめていく。この戦争に対する民衆の目的意識は、満州事変以後の対外戦争とは明らかに異質なものであった。

そこで本稿では以上のことをふまえ、次のような目的を持って考察していく。

①軍隊・兵営の動向に主眼を置き、軍内部の状況を具体的に解明する。この戦争で初めて出征した見習士官・佐々木清少尉の日記叙述を基に、敢えてパーソナルな視点を用いて将校・兵士たちの意識変容を捉えていくことにする。

②将校・兵士という軍隊を構成する人間たちを考察することで、世間一般に抱かれている「忠君愛国」のような現実味のない軍隊像、兵士像ではなく、内情に迫った軍隊像・兵士像を浮びあがらせる。

③軍隊が抱える矛盾と、この時期に問題化した軍紀の頽廃の要因について、将校・兵士たちの心理行動を基にして分析する。とくに注目する点としては、将校・兵士たちの精神荒廃と、それに伴って頻繁に発生する軍隊内でのいじめ問題の実情に迫っていく。

とくに、②であげた軍隊像・兵士像については、世間一般で認識されている精神主義的な軍隊イメージの虚構性を指摘し、新たな軍隊像を構築したいと考えている。

分析の手法であるが、本稿では元陸軍中佐・佐々木清が記した日記「佐々木清日記」（佐賀大学地域学歴史文化研究センター所蔵）を基に、将校・兵士の有事状態における心理動向を中心に考察をすすめていく。歴史学の分析手法である史料解釈を通じ、実証性を重視しながら、出征時の将校・兵士の意識とそれに伴う心理行動を見ていくことにする。

佐々木の経歴を簡潔ではあるが紹介しておこう。佐々木は大分県出身で、一九一四（大正三）年に陸軍士官学校（二六期）を卒業している。彼の同期生には国家革新運動や中国大陸の策略工作で名を馳せた者が多く、相沢事件公判の特別弁護人となる満井佐吉や、東京裁判で物議を巻き起こした田中隆吉などがいる。佐々木自身も一九三三（昭和八）年に満井佐吉と共にファ

シズム運動団体・大日本護国軍を結成し、国家改造運動に邁進した。上記の運動による影響もあり、一九三三（昭和一一）年八月、二・二六事件後の粛軍人事により予備役編入している(1)。

そこで、本稿ではこの日記の書き手である佐々木と、彼が所属する佐賀第五五連隊の将校・兵士の動向を中心に、青島戦および青島守備軍の実態とそれに伴う精神荒廃のプロセスを明らかにしていくことにする。

【注記】

日記等の引用に際し、旧字体は新字体に改め、適宜句読点を付した。

第一章　青島出征をめぐる将校の精神状態

一九一四（大正三）年五月、陸軍士官学校を卒業した佐々木清は、同年六月、見習士官として久留米第一八師団佐賀歩兵第五五連隊（以下、第五五連隊と略記）(2)に配属された。見習士官とは、将校教育の一環で定められた身分である。陸軍士官学校を卒業した将校たちは、ただちに下士官および兵卒の指揮官としての役割を担わなければならないため、その試用期間として半年間の見習士官制度が設定されていた。佐々木が見習士官として勤務し始めたばかりの同年六月、世界情勢が一変する出来事が起こった。第一次世界大戦の勃発である。緊迫感と閉塞感につつまれたヨーロッパ情勢の中で、六月二八日にサラエボ事件が起き、七月二八日にはオーストリアはセルビアを相手に宣戦布告を行ったのである。これが発端となり、未曾有の戦争、第一次世界大戦は開戦された。そして、八月四日にイギリスが参戦したことにより、広域戦争へと発展し、西洋列強は戦争の混乱に巻き込まれていったのである(3)。

イギリスの参戦は、つまりは日本の参戦を意味していた。日本と日英同盟を結んでいたイギリスは、八月七日、日本に対して東シナ海で活動するドイツ海軍巡洋艦の撃破を依頼したのである。同盟国からの依頼を受け、日本はドイツに対して、①膠州湾の軍備撤廃、②膠州湾の艦隊退去、③中国への還付を目的とする膠州湾租借地の日本への交付を要求したが拒絶され、八月二三日に日本はドイツに宣戦を布告したのであった(4)。

日本陸軍はこの大戦に参加するために、久留米第一八師団長神尾光臣中将を指揮官とする、独立第一八師団を編制した。第一八師団下である第五五連隊に対しては、同年八月一六日午後〇時三〇分、動員下令が発せられ、午後二時頃には第五五連隊付の将校等に対し通知がなされた(5)。連隊に配属されて五ヶ月足らずの見習士官佐々木にとって、この命令は「思ハス跳ビ上」ってしまう程の出来事であったという(6)。佐々木にとって、戦時職務どころか通常職務の経験も浅いままでの動員決定であったため、彼なりに驚きを感じつつも「何トナク壮重ナル感ニ打タレタ」との感想を日記に記している(7)。

第五五連隊の出征が決定すると、地元各地において、兵役を志願する者たちが多く現れた。元々、佐賀県内は農村地帯が多く、日露戦争による反動不況の影響もあり、農村の暮らしは貧

困にあえぐ状況にあった。生活も儘ならない貧農層から見れば、兵役は無償で食事に有りつき、かつ着るものにも困らない、好条件の「職業」であった。しかし一方で、兵役志願者の多くは、「天皇の軍隊」という意識概念が非常に薄く、将校教育において常々説かれていた精神主義と彼らの思惑とは随分乖離していた。そして兵役志願者の多くは、兵役終了後に地域社会の上役に就くことを目論んでおり、兵役を社会的な上昇の手段として捉えていた。将校と兵士たちの思想の差異は、そのまま、生活境遇の差異と比例しているといってもよいだろう(8)。

では、戦地出征を控えた将校たちの心理状態はどのようなものであったのだろうか。士官学校を卒業して三ヶ月程しか経過していないにもかかわらず、戦地に出征し、統率者としての任務を遂行するという現実に直面した佐々木は、自分の今の気持ちについて次のように述べている。

兵営モ今一夜ノ夢ヲ結ブノミト思ヘドサホド深キ感ジヲ覚エズ。士官学校卒業ノ夜ノコトヲ思ヘハ物ノ数ナラス。否此ノ度ハ殆ンド何等ノ感動ヲモ起リシト云フ能ハサル程ナリ。誰モ云フ。演習ニ行ク様ナ気持チダト(9)。

佐々木は出征前夜の心理状態を「演習ニ行ク様ナ気持チ」であったと日記に記している。しかも佐々木だけでなく、彼の周辺にいる将校たちも同じような感情を抱いているというのである。さらに佐々木は、出征前夜よりも士官学校の卒業前夜の方が感動は大きかったと感想を漏らしている。戦地に出征するにあたって、兵営内は緊張感に包まれているのではないかと我々は想像してしまいがちである。しかし実際は、出征将校たちにはそれ程緊迫感もなく、戦争に赴くことに対する認識も薄かったことが、彼の日記から見て取れるのである。

同月二九日、第五五連隊は青島に赴くべく、佐賀駅を列車で出発し長崎港へと向うこととなった。佐賀市民は郷土部隊の出征を祝して「万歳」を叫びながら線路に沿って列をなし、第五五連隊を見送った。その時の光景と心情を、佐々木は次のように記している。

今日ハ愈々征途ニ上ルノダ。午后七時三十六分汽笛一声再ビ佐賀ニ帰ラヌ旅立チト思フテ見タ。〔中略〕ピユツト云フ笛ノ音ガナルカ鳴ラヌニ早ヤ見送人ハドヨメキ立ツタ。万歳、ト呼ブ人モ送クル、人モモハヤ狂ウテ居ル様ニ見エル。モハヤ四辺暗黒トマテハ行カストモ提灯デ少ナカラヌ元気ヲ付ケラレル暗サテアツタ。愈々出タ。群衆テハナイ見送リノ人々ハ益々狂ウヨウニ万歳、ト叫ンダ。汽車ノウチカラモ旗ヲ振ツテ線路ニ沿ウ道路踏切村ノ端ナドニハ人ガ一杯ニナツテ万歳、、。トテモ今晩ハ寝ルドコロテハナイ(10)。

佐賀市民たちの熱狂的な見送りに対し、佐々木は「狂ウテ居ル様ニ見エ」たとの感想を漏らしている。民衆の熱狂ぶりとは裏腹に、当の出征将校たちは士気を高揚するような素振りもなく、ただその異常な光景に驚き、気味の悪ささえも感じていた

のである。出征将校たちと民衆たちとの間には、大きな感情の開きが存在していたことが理解できよう。それは民衆たちが村や家族という単位で、兵士の出征というものに地域社会の発展と社会的地位の向上を期待していたからに他ならない。幹部の道を約束された将校たちと、社会的上昇を目論む兵士とその民衆たちとの間には、大きな精神的差異があったことがここから見て取れるのである。

第二章　前線における兵士たちの心理行動

第一次世界大戦は、機関銃を組織的に使用する戦法が主流であった。そのため、機関銃を避けるために塹壕を掘りながら陣地を進め、後方から塹壕を重砲で砲撃する塹壕戦が展開された。日本軍もドイツ軍が篭城戦へ入ったことを受け、攻撃方法を包囲攻城戦に切り替えて、攻防一体の塹壕戦を取り始めることになった。

上陸してからの一ヶ月間、日本軍は野戦隊形で前進した。しかし、その後の約一ヶ月間、第五五連隊は敵堡塁に接近するための散兵壕および交通壕の構築のために時間を費やすことになる(11)。これから軍隊は、塹壕内で寝起きをしながら、敵軍の動向を監視していくという過酷な状況に突入していくことになるのである。しかし、軍隊にとって、塹壕での生活とは、まさに地獄ともいえる環境にあった。佐々木は塹壕生活に入った際の感想を「昨夜迄ノ生活ニ比スレハ実ニ王公ト貧民トノ生活ノ差アルヘシ」と日記に記している(12)。

塹壕内は雨水や地下水により、強い湿気を帯びていた。そのため、足元はぬかるみ、衛生環境は劣悪であった。人間が生活していくには、相当過酷な状況であったと思われる。

また、塹壕構築は飛来する敵弾の合間を縫うようにして行われ、常に危険と隣り合わせの状況にあった。戦闘に直接参加せずとも、塹壕構築の作業中は否応なく命の危険にさらされることになり、将校・兵士たちは強烈な緊迫感と恐怖心に襲われたのである。これは、塹壕構築の際に将校・兵士たちの近くに敵弾が飛来したときのエピソードである。

砲弾六発ハ歩哨ノ身辺ニ落下シ歩哨恐レテモテアマセリト。就中菅原勝造ノ如キハ一間半ハカリ前方ニ著発シ頭上ヨリ砂ヲ浴ビ跳ビ上リテ下士哨捜兵ノ位置迄逃ゲ帰リ再后ハ脚震ヒテ立ツ能ハサル程恐リシカリシト(13)。

軍隊の身辺に敵弾が落下した際、兵士たちはそれに驚いて逃げ惑い、恐怖に慄き脚を震わせていた。この戦争自体は既に中盤を迎えていたが、未だ敵弾と接する機会を持っていなかった兵士たちも数多かった。慣れない実弾が不意に飛来してくる状況に、兵士たちはおそらく初めて前線の中に身を置いていることを自覚したのではないだろうか。

戦闘状況に慣れてきたとしても、実際身近に敵弾が飛来してくると、人間は反射的に恐怖心が湧いてくるものである。交通壕の構築が大詰めを迎えてきた頃、それと同時に敵の砲撃も激しさを増してきた。さすがに、作業している側から敵弾が飛来

する状況になると、自然と作業の効率にもその影響が表れてきた。佐々木が交通壕構築の指揮を執っていた際のエピソードを見てみよう。

始メ陣地ニ進入シ配布スルニ当リ兵卒ノ一団トナリテヤタラニ掘ランヽヽトアセルノミ。線ガ如何ニナルヤラ如何ナル方向ヤラ見別スル余ハナシ。予ハ押シヤクヽヽシテ一人宛間隔ヲ迅速ニ取ラシメ得タリ。其ノ当時ノ兵ノ興奮セル様目ニアリヽヽト残レリ（指キ官ノ沈着準備眼識特ニ必要ナルヲ感セサルヲ得サリキ）。帰途ハ充分用意セシメ逐次ニ二列側面ヲ作リ駈歩ニテ引揚ケシニ後尾ハ恐怖ニカラレテカ先頭ニ引キツメ遂ニ列ヲ乱スニ至レリ。因テ大喝。一度停止ヲ命ジ充分整頓セシム。コレニヨリテ兵ノ心気ヲ沈静ナラシムルヲ得タリ。爾后ハ見苦シキ引揚ケナスニ忍ビサレバ速歩ニテ帰還ス(14)。

第三小隊が交通壕構築を行っていたところ、多数の砲弾が頭上を通過した。砲弾への恐怖心に駆られた兵士たちは反射的にそれを避けようとする。しかし、作業をやめるわけにはいかないので、彼らは怯えながらも壕を掘った。しかし結局、この日にできた交通壕は恐怖心が作用したのか、線が歪んでしまった。また、兵士たちが作業を終えて撤収する時も、その場から早く立ち去りたい一心で焦る余り、隊列が自然に前詰めになり乱れてしまったのであった。

しかし、状況に慣れれば次第に恐怖心も薄らいでしまう。佐々木も二、三日も経てば、「小銃弾ノ飛ンテクルコトハモウ前日来ノ習慣ニナツテ居ルカラチツトモ珍ラシイモノデモ」ないとまで思えるようになっていた(15)。佐々木たちは戦闘状況にも十分順応し、あれほど不満を示していた生活環境に対しても、あまり関心を持たなくなっていく。恒常的に命の危険に晒された状態に置かれていると、自身の生活環境などは二の次として扱われていったのである。

次に、前線地帯における物資調達の状況について見ていきたい。戦況が膠着した状況の中での物資輸送は、困難を極めたものと推測される。実際、将校・兵士たちは前線周辺の空家や民家に侵入・物色することで、生活物資を調達することもあった。次の史料は、孤山・浮山の戦闘によって空き家になったドイツ人家屋に、日本兵が侵入した時の様子を記したものである。

山本中尉殿ト共ニ下士卒十名ヲ率ヒ116高地ノ西方独逸人家屋ニ侵入シ物品ヲ奪取シ帰ル。柱ニ掛リクル暦ヲ見ルニ「セプテンバー二七」ト赤字ヲ以テ示サレタリ。嗚呼独人モ27日迄ハ此ノ家屋安息セシモノナルヘシ。獲物トシテハランプ一外コップ類トス(16)。

この時、佐々木は家屋内を物色中、暦が孤山・浮山陥落当日の日付で止まっていることに気づき、戦争がこの家庭の営みを奪い去ったことを自覚した。佐々木にとっては自国の利益につながる戦争であるが、この家庭にとっては安息な暮らしを蹂躙し、奪うだけの野蛮な戦いでしかないのである。この記述から、

佐々木の複雑な心情が見て取れよう。出征してから二カ月弱、将校・兵士たちは徐々に戦争に対して緊張感を持ち、戦争が人間の営みを一瞬で奪い去るほどの残酷な力を擁していることを、身をもって実感していったのである。

一方で、将校・兵士たちは戦闘状態の長期化と日常的な略奪行為を行う中で、感情が麻痺し始めていく。物資略奪の際、以前は複雑な心情を抱いていた佐々木も、徐々に罪悪感を感じなくなっていく。佐々木が中国人家屋の倉庫を捜索した際の様子を見てみよう。

昨夜ノ穴ノ捜索ヲナシ丸太及板ヲ使用シアルヲ偵察シ直チニ短兵急ニ掘リ出シヲ始メ須臾ニシテ来ス。獲タル材料尠少ナリ。此ノ穴倉ハ支那人ノ倉庫ニシテ穀物、衣類、帳面類集積セシ水ニ浸サレ異臭ヲ放テリ。中ヨリ分捕リシモノ敷布二枚。我モ支那ニ来リテ盗賊ノ所業コレニテ二回。一回は独人ノ家屋ニ浸入シコップ類ヲ奪取トス。戦時ナレハコソ斯クノ如キ破壊的愉快モ味ヒ得シ。平時人ノ嘗ム能ハサル事ナリ(17)。

この史料によると、佐々木は略奪行為を行いながら「斯クノ如キ破壊的愉快モ味ヒ得シ」と感じるまでの心理状況に陥っていたことが理解できる。略奪行為を日常的に行っていくうちに、佐々木は戦時だから仕方のないことだと思考を切り換え、罪悪感を失っている。このような思考の変化、感情の麻痺は、軍隊全体にも広がっていった。戦闘状況の長期化は、兵士たちの行動にも影響を与え始める。「戦時だから仕方がない」という発想により、この頃から兵士による軽率な行為が頻発し始めるのである。

第三章　士気の低下と軍紀の頽廃

同年一一月七日、独立第一八師団はドイツ軍第一線陣地であったモルトケ・ビスマルク・イルチス各砲台を完全占拠し、東アジアにおけるドイツ最大の交易地青島を占領した。その後、独立第一八師団は、戦勝の余韻に浸る合間もなく、青島の警護守備のために師団の再編制に取りかかった。この再編制により、同月三〇日、第五五連隊から第二大隊が青島守備軍として残留することが決定する(18)。

第二大隊付の将校である佐々木は、青島守備軍に編入することとなり、青島に残留することが決まった。佐々木は、仲間であった将校や自身の部下たちの凱旋を見送る立場となり、共に凱旋の喜びを分かち合うことはできなくなった。佐々木はそのことを非常に残念がり、戦地で苦楽を共にした兵士たちとの別れに対し、次のように心情を吐露している。

左側ニ中隊ノ予後備兵整列セリ。列中ヨリ小隊長殿ト叫ビテ別ヲ惜ム様イヂラシ。予モ無限ノ感ニ打タレ只会釈セシニ過キズシテ何トハ知ラス涕涙ノ目ヲ湿ホスヲ覚エ人目ヲ忍ビタリ。思ハズ可愛キ部下ヨ今汝等ト別ル健在ナレヨ又会フ時ヲ夢ミテ喜ブト叫ビタカリキ熱キ情ハ胸ニ溢レタ

リ。殊ニ他小隊ノ者ガ二、三名我ニ声掛ケテ別ヲ惜ミ呉レシトキハ云ヒ知レサル嬉シサヲ覚ヘス。

嗚呼予ハ未ダ年若ク感情ニ激シ易ク兎モスレハ暴力ヲ振ハントス。独リ小隊ノミナラス他ノ小隊ニモ是ヲ用ヒ他中隊ニモコレヲ振ツテ昂然タリ。サレド愛ハ愛ナルカナ。愛ハ反比例スルモノナルベシ。小隊長ト部下ノ離別ノ情筆ニ述ベ難キモノアリ尽シ難キモノアリ宣ナリ。予ハ始メテノ部下ヲ出征シ以テ弾丸雨注ノ中ニ生死ニ倶ニ誓ヒシ主従関係アレバ斯クハ名残惜シクアルケルナラメ。彼等ハ万里ノ波涛勇マシク故国ニ凱旋ノ錦ヲ飾リ懐シキ父母ト昔ヲ追憶シツ、戦話ノ其ノ後ニ筆ヲ異国ノ空ニ運バス。新シキ心根アリヤ無シヤ(19)。

佐々木は部下たちと一緒に凱旋できない寂しさ、惜別の念で心がいっぱいになっていた。また、こうやって兵士たちが自分との別れを惜しんでくれることは、若輩者の見習士官であった佐々木にとって、非常に感極まる出来事であった。初めて小隊長として兵士たちの指揮を取ったにもかかわらず、経験も未熟な自分を慕ってくれることは、佐々木に自信をもたらすと共に、反省をも促した。部下たちとの別れは同時に、この戦役の中で若さゆえに行ってしまった自身の感情的な行動を振り返る契機を佐々木に与えてくれたのであった。

凱旋部隊を見送った同日、第二大隊もまた、青島停車場より高密（現・山東省高密市）に移動することになった。一二月三日に高密に到着した第二大隊は、本部を莱州（現・山東省莱州市）に設置し、佐々木が所属する第八中隊も、高密付近の亭口集という地に拠点を置いた。第八中隊は亭口集・官庄・門村付近の電線守備隊を任されることとなり、佐々木は高密の北東部付近の村、官庄の守備隊責任者として勤務することになった(20)。

官庄に移動してからの第三小隊の任務は、主に電線警備であり、青島陥落以前と比べて時間にゆとりが持てるようになった。兵士たちは任務の合間に、手紙を書くために将校に字を習うなどして、個々に有意義な生活を送るようになっていく。しかし一方で、戦闘中の劣悪な塹壕生活とは打って変わったような快適さを得たことにより、兵士たちの軍隊生活に対する考えに変化が生じていく。

占領地の守備のために青島に駐留し続けているものの、将校・兵士たちは戦闘が終結したことにより、目的意識を失い始めていった。そもそも彼らは、青島が陥落すれば故郷に凱旋できると考えていた。しかし、思いもかけず青島守備軍としての駐留を命ぜられ、彼らは少なからずの精神的打撃を受けたはずである。この精神的な変化は徐々に彼らの生活態度にも表れ始めていく。佐々木も兵士たちに字句を指導したりしながら駐留生活を過ごしていたが、そのような日々に対し、「何ニモ外ニスル事ガナイ」と不満を抱え始める(21)。戦闘終結後の空虚感と、目的意識が持てない駐留生活が生み出した精神的弛緩は、のちに青島守備軍を悩ます要因へと結びついていくのである。

青島陥落後、最初の正月を官庄で迎えた。新年を迎え、佐々木は兵士たちと共に酒を飲んで楽しく騒いだ。そして、官庄の村人たちも、兵営まで「掛物」と「牛肉六斤菓子八包卵五十個

生鶏四羽大キナル入物（朱塗）」を持参し、新年の挨拶にやってきた[22]。

しかし、新年の賑わいを過ぎてから、小隊内にある変化が生じだす。正月の余韻を引き金として、軍紀が急激に乱れだすのである。まず、一九一五（大正四）年一月六日、祝賀ムード覚めやらぬ兵士たちが、勤務中であるにもかかわらず飲酒を行っていたという事件が発覚した。

午后三時頃ナリシナラン。炊事場ニテ何事カクダラヌコトヲ云ヒテ立チ居ル野崎ニ不団気付キヨク見レハ酒ニ酔ヒ居ル模様ナリ。チャンチュウヲ飲ミシナリ。直チニ呼ビテ責ム。中山ガ発頭人ナリト。中山ヲ呼ブニ彼笑ヒニ紛ラシテ来ル。怒心頭ニ発シ鉄火箸ヲ以テ打擲ス。彼此ノ頃増長シテ我意底止スル所ヲ知ラス。〔中略〕怒気ハ遂ニ火箸ノ先端ニ実現ス。遂ニ輪形ニ彎曲セリ。水扱苦力ヲ使ヒテ四斤ノ「チュウ」ヲ購ヒ飲ミ尽シタルナリト。実ニ呆レサルヲ得ス（七人シテ飲ム）。二日前カニ彼酒気ヲ帯ビ荒木ニ飯少ナシト食ヒ掛シリト云フヲ耳ニスルヲ照シ見レハ従来ノ彼ノ慣用手段ナリシヤモ計リ難シ[23]。

これによると、中山という兵卒（一等卒）が中心となり、小隊の兵卒七名が勤務中、しかも白昼に「チャンチュウ」（＝焼酎）を飲んでいたというのである。しかも、佐々木がそのことに気づいて戒めても、中山は反省の態度も見せない。結局、佐々木は中山に対し、鉄火箸を使って殴打制裁を行ったのであるが、小隊内の軍紀の乱れはまだ収まらなかった。

飲酒事件が発覚してから、二週間ほど経過した同月二四日、また新たな事件が発生する。佐々木が勤務後に入浴している間、何者かが小隊長印を無断で使用していたというのである。このことに気づいた佐々木は小隊内を調査し、その結果、鎌田関太郎という兵卒が犯人であることが判明する[24]。鎌田は事件の発覚当日は亭口集に赴いており小隊を留守にしていたが、同月二五日の朝、小隊に帰官したところを、佐々木に呼び止められた。その時の佐々木の鎌田に対する怒りは相当なものであった。そのことに関して、佐々木は日記の中で次のように記している。

怒リニ満タサレタル予ハ斯ル腐腹漢ノ訓戒モテ救済スル能ハサルヲ知ル。故ニ最初ヨリ殴打ノ威力ヲ借ルノ止ムナキヲ敢テス。殴打シ見レハ稍白痴ナリ。然シ今日此ノ頃ノ如ク精神訓戒ヲ重スルモ尚斯クノ如キ醜漢出テタルニハホト丶呆レ返ラサルヲ得サリキ。然モ此ノ度ヲ以テ第三回目ト云フニ至リテハ言語同断。実ニ愚者ノ骨無シ男ホド恐ロシキ奴ハナシ。

前二回ハイチレモ予ガ高密ニ赴キシ留守中ヲ窺イテ是レヲ敢行セルナリ。今ハ入浴ノ隙ヲ見テナセシナリ。従来ノ二回ハ予ハ只印肉ノ余リニ乱レ印判ノ余リニ手荒キ使方ヲイブカリシノミニテ斯クノ如キ野郎ノ所為トハ想到スル能ハサリキ。今回ハ軍事郵便ノ判ハ使用シアルモ其ノ封筒ナキニヨリ疑ヲ抑〔挟カ―引用者註〕ムニ至リ各自ニ糺詰セシニ始マル。衛兵ノ役立チシコト云フニ及ハズ[25]。

佐々木は鎌田を見つけるや怒りの余り、弁解するような時間も与えず殴りかかった。それだけ、佐々木の怒りの度合いが大きかったこともあるが、公印を自身の預かり知らぬところで使用されたという事態の悪質さを考えると、これだけ腹を立てるのも無理はない。しかも、その行為が一度目ではなく、三回目であったという事実に、佐々木はショックを隠せなかった。前回の飲酒事件もあり、訓戒を強化していたのであるが、小隊内における軍紀の弛緩は進んでいく一方であった。

また、同じ中隊に所属する別小隊においても、不祥事事件があったとの報を受ける。佐々木は第八中隊の本部が置かれている亭口集に立ち寄った時、次のような話を聞いて愕然とする。

亭口集ニ着ス。到リテ中隊長ヲ訪フ。御話ヲ承ハリテ驚キ呆キレタリ。其ハ中隊ノ一大面目ヲ失墜セシメタル一大事件ナリ。衛兵、不寝番、及二、三ノ悪兵等大隊糧秣中ヨリシャンペン酒十本、果物缶詰、慰問袋等目ボシキ品物ノ梱包ヲ打チ破リ盗ミ出セリト云フ。一事ニシテ其ノ未ダ不明ナルモノ多ク而モ是ハ大隊長殿ノ私物ノ品物大部ヲ占ムルニアリ。洩レ聞クニ前回ニモ斯クノ如キコトアリ。大隊ヨリ取調ベニ就キ中隊ニ命令シ来リシヲ中隊長ハ例ノ一撤怒リテ中隊ニ限リテ断セン然ル事ナシト上ニ対シテ一喝的返答ヲナセルナリト。而モ其ノ言ノ終ラサルニ此ノ醜態暴露。中隊長殿ノ心配察スルニ余リアリ。嗚呼度スヘカラサルハ兵卒ナリ。然モ是レ勤務者ノ大部ノ所業ナリト聞クニ及ンデハ驚クト云ハンヨリハ寧口呆レタリト云ハンヲ当レリト考フ。是ガタメ官庄ヨリ青嶋ニ下士ヲ急行セシメテシャンペン酒某物ノ缶詰等ノ買物ヲナシ呉レ至急（明后日迄ニハ是非トモ）送リ呉レヨト云フニアリ。金六十円ヲ握サレテ早急帰官ス。道々昨ノ鎌田ノ醜行ヲ思ヒ今日ノ第二小隊即チ隣家ノ殆ンド軍人ニアラサル醜類ノ巣屈ヲ想ヒ思ハズ肌身ニ粟ヲ生ジ心中ノ宛莫ク感スルコト転タ切ナリ[26]。

佐々木が亭口集に到着した時、第二大隊付の兵卒たちが大隊糧秣に保管してある食料物資を盗み出して飲食していたという事件が発覚し、第八中隊本部は混乱に陥っていた。しかも、盗んだものの中に押川第二大隊長の私物の多くが含まれていたということが判明し、三善第八中隊長は慌てふためいた。三善中隊長は、押川大隊長に知られたくない一心で、この事件を隠蔽しようと画策する。丁度その時、中隊本部に立ち寄った佐々木は、三善中隊長から盗まれた物資を至急買い足してくるよう依頼され、後始末の一端を担うこととなった[27]。佐々木自身も、自分が統率する小隊の度重なる醜態に頭を悩ましていた矢先の事件であり、軍紀が紊乱した現状を目の当たりにして歯がゆい想いを抱くのであった。

第四章　軍隊内における「いじめ」

第三章では、戦勝や正月をきっかけに軍隊内での士気が下がり、軍紀が弛緩していくことを指摘した。本章では、そのよう

な現象と連鎖して多発する軍隊内での「いじめ」について見ていくことにする。

第三小隊において内々に金銭貸借状況を掴むべく、所持金調査が行われたときのことである。この調査により、複数の一等卒が特定の二等卒に対して恐喝行為をはたらいていたことが発覚する。責任者の佐々木にとっては、寝耳に水の話であった。この事件は、一等卒数名が松尾という二等卒から、頻繁に金銭を巻き上げていたというものである。しかもその主犯は、以前飲酒事件を起こした中山であった。中山は、以前の身勝手な行動を反省するどころか、佐々木の知らぬ間に更なる悪行を働いていた。自分より立場の弱い二等卒を複数人で脅して金銭を奪うという事件内容の悪質さに、佐々木は愕然とする。佐々木は発覚直後には激怒したものの、小隊の責任者としての任務を果たすべく、怒りを押し殺しながら中山にその事情を聴取することにした。すると中山は「松尾ガ我ヲ信用シテ金ヲ云フ故ニ預ケシト彼ニハ入用毎ニ若干宛ヲ勝手ニ取ラシメ与ヘ彼ニ控ヘシメタリ。モハヤ二、三十銭位ハ残ル居ルナラン」と、反省の色も見せずに平然と答えたのである(28)。中山の開き直った態度に、佐々木は強い憤りを感じつつも、冷静に対処するよう自分に言い聞かせ、次に被害者である松尾に詳細を問いただすことにした。そして、松尾の話によって、佐々木はこの事件の真相を知ることになる。

松尾ヲシテ余儀ナク預ケシメシ金ハ三円ニシテ井上上等兵見兼ネテ松尾ニ取リ返シ残リ一円ハ愈々有耶無耶裡ニ葬サリ去ラントセリ。此ノ事端ナク此ノ度ノ調査ニヨリ松尾ノ申立ツル処ノ金銭ト大差アリ。愈両者ヲ調ヘ見ルニ松尾ノ云フ所ト中山ノ言ト全ク相反ス。松尾ハ尚其ノ外一度高密酒保ニテ彼ニ三十五銭ヲ貸与シアリ。前記三円ハ中山ガ彼ノ所持金ヲ調ヘ我ニ預ケヨ汝所持セハ費消シ尽サント自己ノ嚢中ニ収メ自ラ常ニ銅子袋ヲ置キ松尾ニハ銅子ヲ勝手ニ取ラシメ汝控ヘ置クヘシト。斯クシテ松尾ハ銅子四十銭ヲ貰ヒ他ニ二円ヲ取リ返セリト云フ。故ニ未ダ一円ヲ預ケアル次第ナリト申出テタリ(29)。

松尾の証言によると、三円を中山に預けた内、未だ一円は戻ってこないという状況なのだという。しかし、そのことを中山に問いただしても、平然と虚偽の証言を行い、「自分ハ覚エニ記シアラサル」と、あいまいな発言を繰り返すばかりであった(30)。佐々木は中山の態度に手を焼くが、一方では以前のように彼を殴打で屈しさせようとはせず、話し合いで解決しようと努めている。

佐々木は中山・松尾の二人を事情聴取したものの、結局、この件で中山をたしなめることはしなかった。佐々木は中山の人間性を見抜けなかったという自分自身に対する憤りを感じる一方で、この件に関し、半ばさじを投げているような態度を取っている。佐々木は中山の行動が小隊内で及ぼす影響について、次のように記している。

中山ハ連隊ニ在リシヨリ横着ナルコト煮テモ焼テモ食へ

ヌ人間トテ一般恐レタリト云フ奴ナリ。彼我従卒トナリシトキ皆謂ヒタリト。『禄ナコトニハナルマイト』。予ハ人選ヲ誤マリシナリ。〔中略〕其ノ後一同果シテ予言ノ如シト憤慨セシト云フ。又或者ノ言ヲ耳ニセシハ中山ハ分隊ニ至リテ己ガ言ハ小隊長ヲ動カス我意ノ如クナル故ニ我ニ好クスル者ハヨク報告シヤラント。大キナ面シテ分隊ヲ立チ歩キタリト。第四分隊ノ如キハコレニ憤リ彼中山如キニオベツカヲ使ウ必要ナシ見ルヘキ者見レルレバ我等ノ真意ハ知ラルト公言セリト宣ナリ。中山カ当時兎角第四分隊ヲ讒誣中傷スルコト多カリシハ(31)。

中山の悪態ぶりは、佐々木が気づかぬうちに、他小隊の兵士たちにも知れ渡っていた。そのため、兵士の中には、中山に胡麻を擦る者もいれば、一方では上官に告げ口しようと企む者もいた。しかし、中山が自分の悪行が外に漏れないよう、兵士たちを威圧して口止めさせていたために、佐々木は彼の悪行に気づくことなく、野放しにしてしまったのである(32)。そのうえ、将校である自分を見下し、「己ガ言ハ小隊長ヲ動カス」とまで言い切る中山を、佐々木はただ見て見ぬふりをするしかなかった。自分よりも年配であり、且つ兵士たちにも恐れられた存在である中山に対し、佐々木は畏縮していく。たとえ、自分の階級が上であろうとも、中山が兵士を複数束ねて反抗すれば、佐々木は一溜まりもないであろう。このような軍隊内での乱れた階級序列は、兵士たちが若輩の上官を軽んじていく要因にも繋がっていくのである。

第五章　軍隊秩序の弛緩

兵士たちの醜態が目立つ中、三月一日に「上等兵ノ進級者姓名小隊編入者及転出者ノ発表」が行われた。第一章で若干触れたが、兵士たちにとって、上等兵へと進級することは社会的上昇の手段として考えられていた。第三小隊内でさまざまな悪行を繰り広げている中山も、一等卒から上等兵へ進級する可能性を持っていた。丁度、中山の対処に苦慮していた佐々木は、小隊内での人事権を掌握する立場にあったが、佐々木は中山を「上等兵トシテノ価値ナシ。矢張リ一等卒ニテ充分ナリ」として、進級を見送らせた(33)。

しかしその翌日の二日、佐々木が一番畏れていた事件が発生する。佐々木は三善第八中隊長より、第三小隊の兵士三名が、中国人に対して暴行事件を起こしたとの連絡を受けた。しかも、その三名の兵士の中には、またも、あの中山の名が記されていたのである。今回の事件は、中国人に対する暴行ということで、国際問題にも繋がりかねない。被害者からの訴えを受けた三善中隊長は、今回の事態に激怒し、佐々木に次のような内容の書信を送ってきた。

昨日ノ下リ電路斤候三名（長、中山寛次、加藤仙蔵、山口梅次）ガ不都合ナ行動即チ村中ニテ一婦人ニ戯ムレテ落馬セシメ又他ノ婦人ヲ追ヒテ悲鳴ヲ挙ゲシメ或ハ卵ヲ奪ヒ結局支那人ノ殴打トナリ村長学校教員来リテ仲裁セシメ是亦殴打ス。而シテ異状ナキ旨ヲ報告セリシ人共虚偽ノ言ヲ

左右シテ眞ニ吐カズ。本日亭口集ニ止メ置クトノ事ヲ起シ早急森ヲ急行セシメヨトノ事ナリ(34)。

青島守備軍編制後、第三小隊では兵士たちによる、さまざまな醜悪事件が発生していた。しかし、それらの事件は、小隊内で事態を収拾できる範囲での出来事であり、上部組織である中隊や大隊にまで、伝達されることはなかった。しかし、今回の事件は中隊本部が設置されている亭口集付近で発生しており、被害者の中国人が直接中隊に出向いて抗議したことで、事態が大きくなってしまったのである。初めて第三小隊内での不祥事が露呈してしまったことに、佐々木は「当小隊ハ今日迄些ノ欠点ナカリキ。今ニ至リテ不名誉ナル事件」が起きてしまったと、日記において大いに嘆いている(35)。そして、事態の大きさと精神的ショックを抱えきれなくなった佐々木は、「思ハス落涙」してしまうほどに追いつめられてしまう(36)。

しかし、当事者の兵士三名は佐々木の思いなど知る由もなかった。彼らが小隊に帰還した際の様子を見てみよう。

中山寛次以下三名夕暮帰還。サレド一言モ責ムルコトヲナサザリキ。而シテ若干時舎后ニ起立ヲ命ス。然ルニ予其ノ附近ヲ通過スル時ハ直立不動ノ姿勢ヲ持シ然ラサルトキハ壁ニヨリカヽリ居シトハ飽クマデ不埒ナル奴共ナリ(37)。

佐々木は三人が帰還した時、彼らに対してこの件を詰問することができなかった。しかも、小時間過ぎて彼らを起立させたところ、反省の様子も見せずに壁に寄りかかる有様である。三人は完全に佐々木を舐めきっていた。事件の当事者の一人である加藤仙蔵は、反省の態度を見せるどころか、演習中であっても「教練ニモ出デザルノミナラズ下給品タル酒ヲ上等兵モ居ザルニ喰イ居ル」有様であった。佐々木は加藤の職務怠慢に対し、「不謹慎言語ニ絶セシカハ教練后呼ビ寄セモハヤ訓戒ノ救フ能サルヲシルヲ以テ暴力ヲ振ツテ懲戒セサルヘカラサルニ至リシハ返スヽヽ遺憾ニ堪エス」との感想を漏らしている。佐々木が敢えて殴打制裁を行わず、出来るだけ口頭で注意を促すように努めている様子が窺い知れる。佐々木の本心では「醜類大馬鹿者共ハ予ニ痛キ目ニ会ハサル、如クニ仕向ケタリ。彼等ハ殴打ニヨリテ始メテ効力アリ」と考えており、殴打制裁を是認している(38)。しかし、暴力に訴えるのではなく、対話によって関係改善を図ろうとした。見習士官の佐々木の心理には、部下を暴力によって制することへの罪悪感や、恨みを買うことへの畏怖心が存在していたのかもしれない。佐々木から激しい叱責を受けた加藤は、とりあえず自分の罪を認めた。しかし、その反省は形だけに過ぎなかった。その後、加藤は反省するどころか、叱責されたことを逆恨みし、佐々木に対して反抗的な態度を取ったのである。その態度は、実に子供じみていた。その時の様子が次の史料に記されている。

加藤仙蔵他ノ者ハ敬礼ヲセシニ一人ナササルノミカ不遜ノ態度ヲ敢行ス。彼以前予ヨリ苛責セラレシヲ却ツテ怨シ根ニモチテ兎角我ニ楯突クニ至リ敬礼ナド眞實ニナセルコ

トナシ。又本日モ裸体ニテ他聯隊兵ノ前モ支那人ノ前モ恥ヂズ。後庭ヲウロツキ恥ヲ恥トセス加エ予ニ対シ敬礼ヲモ為サリキ。其ノ際予ハ咎メザリキ。斯クノ如ク前ノ懲戒ハ反ハテ謹慎不遜ノ態度ヲ歴然眼前ニ表現スルニ至リシカハ衛兵ヲ科ス。茲ヲ以テ彼只今予ニ対シ反抗的態度ニ出テタルナリ。予ハ断ジテ今后兵卒ヲ打タス（守備勤務中）ト云ヒシモ是ノミハ例外ナリトテ甚ダシク打擲セリ。後呼ビテ彼ニ糺詰シ訓諭セシニ彼真ニ誤マレリ。小隊長殿ノ意ヲ誤解セリ。今后ハアラン限リノ努力ヲナスヘシト誓フ(39)。

逆恨みした加藤は、佐々木に対して敬礼もせず、後庭を裸で歩き回るなどして反抗し始めた。その様子を見て怒りが爆発した佐々木は、とうとう加藤に対し、激しい殴打制裁を加えてしまう。青島守備軍編制後、佐々木は兵士たちに殴打制裁を加えぬように、極力努めていた。しかし、国際問題にも発展しかねない事件を起こしておきながら反省の様子も見せず、挙句の果てには逆恨みをして反抗的態度を取る加藤に対し、佐々木は感情を抑えることができなくなってしまったのである。加藤を殴打した翌朝、我に返った佐々木は、自分が行った行為に対し自信を持てなくなってしまう。小隊内の兵士たちが自分の行動に対して、どのような感情を抱いているのかが気になり始めたのである。

起床后小隊一同ヲ整列セシメ昨夜ノ動機、加藤ノ誓書、詫書、予カ暴力ヲ振ヒシ理由ヲ一同ニ説明シ誤解ナカラシム。予ガ此ノ訓示ナカリセバ或ハ甚ダシク予ヲ誤解スルモノアリシアラント思ハレタリ(40)。

佐々木は起床後、小隊全員を集めて加藤を殴打した経緯や理由を説明した。小隊の兵士たちが自分のことを誤解しないために、佐々木は説明を行ったのであるが、彼は明らかに兵士たちに反感を買わないよう警戒している。将校であり上官であるはずの佐々木が、兵士たちに畏縮していることは、階級身分によって保たれるはずの軍隊秩序が乱れていることを象徴している。

軍隊では、人生経験も浅く、まだ年若い将校が、直接兵士を統率する立場に置かれる。そのため、軍隊の中には、階級身分の違いに反して、兵士たちの方が将校よりも年上で、且つ人生経験も多く積んでいるという逆転現象が存在していた。このことが要因となり、しばしば将校と兵士の間に軋轢が生じた。階級関係と年功序列が一致しないという軍隊が抱える矛盾は、軍隊秩序の弛緩の大きな要因となっていたのである。

おわりに

佐々木が所属する第二大隊は、一九一五（大正四）年五月三〇日、無事佐賀に帰営した。しかし、佐々木は凱旋した時の感情を全く日記に記すことなく、平常勤務に戻っていく。果たして、彼が満顔に笑みをたたえて帰国することができたのだろうか。

士官学校を卒業したばかりの新米将校が初めて目にした戦争

と軍隊の実情は、おそらく怠惰なものとして彼の目には映ったであろう。佐々木は二一歳という年齢で、戦争の現実を目の当たりにし、軍隊の惰性的体質がもたらす弊害に翻弄された。彼がその後、満州事変期に国家改造運動に邁進していく思想的背景には、この戦争によって経験したことが反映しているのではないだろうか。陸軍が唱える精神主義と実情とのギャップ、軍紀の頽廃、そして兵士による将校への反抗など、軍隊が抱えているさまざま問題を自ら体験したことで、彼は日本陸軍の進む先が決して平坦ではないことを悟ったのかもしれない。

本稿では、日独青島戦争を事例として取り上げ、軍隊を構成する将校・兵士たちに着眼してその内情を明らかにしていった。そして、その内情は、一般的にイメージされている軍隊像とはかけ離れた、実に人間らしいものであった。将校・兵士たちは、戦地であるにもかかわらず利己的な行動を取り、慣れてしまえば戦争の緊張感を忘れてしまう。とくに、兵士たちは「天皇の軍隊」という意識とは無関係に、兵役を自身の社会的飛躍の手段として捉えていた。将校と兵士の最も異なる点はここであろう。

一方、我が強い兵士たちに対して、青年将校たちは注意することも怠り、畏縮していたという実情も存在していた。これは軍隊の「事なかれ主義」的な体質が影響していると考えられる。事件や不祥事が起きた際、軍隊は兎にも角にも隠蔽しようと画策する。このような体質が、軍紀頽廃、軍隊秩序の乱れにつながっていくのである。

日独青島戦争では軍紀の頽廃が表面化するものの、軍上層部は具体的な対策に乗り出せないでいた。軍隊の階級序列が抱える社会的矛盾は、兵士が青年将校を見下し、反抗的態度を取らせる要因になっていく。しかし、陸軍はこのような軍隊構造を改めることはせず、惰性な姿勢を取り続けていったのである。

註

（1）佐々木清に関する研究として、平井一臣・有馬学「陸軍の国家改造運動にみる中央と地方――佐々木清関係文書の検討と紹介――」（九州大学文学部『九州文化史研究所紀要』第三八号、一九九三年）、拙稿「一九三三年における陸軍中枢体制の変容――満井佐吉少佐問題をめぐる政治的波紋――」（『年報日本現代史　歴史としての日本国憲法』第一一号、二〇〇六年）などがある。

（2）佐賀歩兵第五五連隊は一九〇五（明治三八）年、日露戦争での兵力増加を目的として編制された連隊であり、宇都宮第一四師団歩兵第五五連隊を基礎としている。日露戦争の戦後守備を務めた後、第五五連隊は一九〇七（明治四〇）年における二師団増設によって、第一四師団から久留米第一八師団へと編入されることとなった。衛戍地は佐賀県佐賀市。壮丁徴集区域は佐賀県全域および長崎県の一部と定められた。第五五連隊の佐賀市衛戍は、日露戦争後の反動不況から脱出すべく、佐賀商業会議所を中心に連隊誘致運動を行った結果、実現した。

（3）西洋列強による帝国主義化が進む最中、一八八二年、フランスを孤立させるという目的で、ドイツ・オーストリア・イタリアは三国同盟を締結した。しかし、この同盟を背景に、ドイツは経済力の発展に成功し、強力な海軍力と共に世界政策を推し進めていったのである。これらドイツ

の動向は、三国同盟の性格を変化させ、対イギリス・ロシアという新たな性格をも生じさせる結果となった。そして、ドイツに対する警戒心を強めたイギリス・ロシア・フランスは、一九〇七年に三国協商を形成することで、さらなる対立姿勢を深めていったのである。このような世界情勢の中、一九一四年、サラエボ事件を契機に第一次世界大戦は勃発した（木村靖二『二つの世界大戦』山川出版社、一九九六年、五～一一頁。

（4）斎藤聖二『秘大正三年　日独戦史』解説、ゆまに書房、二〇〇一年三月、一九～三一頁。

（5）『歩兵第五十五連隊史』大正一四年度版、帝国在郷軍人会本部、一九二五年、六三頁。佐賀大学地域学歴史文化研究センター所蔵「佐々木清日記」一九一四（大正三）年八月一六日付。

（6）前掲「佐々木清日記」同年八月一六日付。

（7）同前。

（8）拙稿「第一次世界大戦期における軍隊と地域社会――佐賀歩兵第五五連隊の青島出征を事例に――」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』第一号、二〇〇七年。

（9）前掲「佐々木清日記」同年八月二八日付。

（10）同前、同年八月二九日付。

（11）斎藤聖二「日独青島戦争の戦闘経緯」『シオン短期大学研究紀要』第三四号、一九九四年一二月。

（12）前掲「佐々木清日記」同年一〇月五日付。

（13）同前。

（14）同前、同年一一月四日付。

（15）同前、同年一一月六日付。

（16）同前、同年一〇月七日付。

（17）同前、同年一〇月二五日付。

（18）青島守備軍の編制により、第二大隊は独立第六大隊へと隊名を変更させる。それに伴い、中小隊名も変更され、それぞれ第八中隊は独立第四中隊、第三小隊は独立第三小隊へと変った。しかし、本稿では隊名の混同を避けるため、母体である第五五連隊での呼称を引き続き使用することにした。

（19）前掲「佐々木清日記」同年一二月二日付。

（20）「大正四年三月第三旬状況報告」、防衛省防衛研究所所蔵『欧受大日記』一九一五（大正四）年七月下所収。

（21）前掲「佐々木清日記」同年一二月一〇日付。

（22）同前、一九一五（大正四）年一月一日付。

（23）同前、同年一月六日付。

（24）同前、同年一月二四日付。

（25）同前、同年一月二五日付。

（26）同前、同年一月二六日付。

（27）軍隊内での不祥事事件は、そのほとんどがもみ消されてしまうため、事件の隠蔽する様子を知るうえで、非常に意義のある記述であるといえる。

（28）前掲「佐々木清日記」同年三月一一日付。

（29）同前。

（30）同前、同年三月一一日付。

（31）同前。

（32）同前。

（33）同前、同年三月一日付。兵士が進級する際には、直属上官の意が強く反映していたことを示している。

(34) 同前、同年三月二日付。
(35) 同前。
(36) 同前、同年三月三日付。
(37) 同前、同年三月二日付。
(38) 同前、同年三月八日付。
(39) 同前、同年三月二三日付。
(40) 同前、同年三月二四日付。

(はやし　みわ・日本近代史)